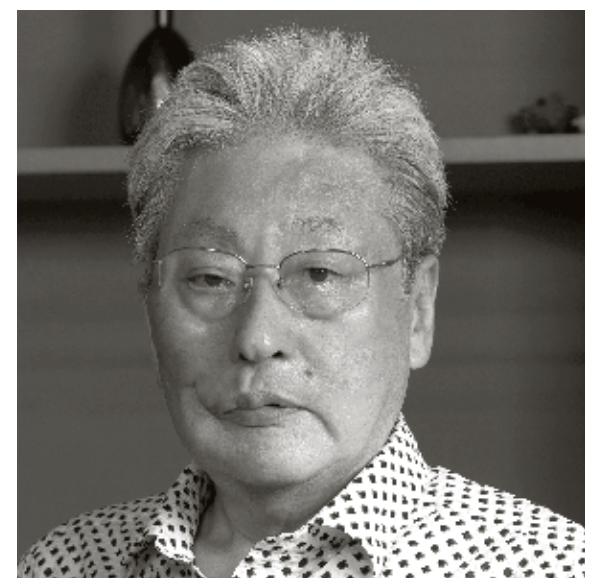


金沢市工芸協会 100 周年記念

未来につなぐ「金沢の工芸」展 開催ごあいさつ



本会は、大正 14 年に「金沢市意匠図案研究会」として設立以来、激動の時代を乗り越え、幾多の変遷を経ながらも、昨年 100 周年を迎えることができました。これもひとえにみなさまのご支援とご協力、そして偉大な先輩方のたゆまぬ努力の賜であり、100 年繫げてくださったことに對し、感謝の念に堪えません。

本展覧会は、100 周年を記念して昨年より開催してきた様々な催しの締めくくりを飾るものです。「これまでの 100 年をふりかえり 100 年後の未来に金沢の工芸を継承する」ことをテーマに、師弟関係や親子関係、作家同士の交流など、本市工芸の歴史を紡いできた作家たちの系譜に着目し、本会や金沢の作家たちが果たしてきた役割、そして今後に期待されることを読みときます。この展覧会が未来へのかけはしとなり金沢の工芸の更なる発展に少しでも寄与できれば幸いです。

本会は、革新を追求し創作するという理念と伝統を引き継いで参りました。この姿勢こそが 100 年の長きに渡り本会が続いてきた所以です。今後も「今日作った物はもう古い」を念頭に、会員一同、常に新たな意匠や技術を希求し、研鑽に励んで参ります。

結びに、あらためて関係各位へ謝意を表するとともに、変わらぬご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げ、ごあいさつといたします。

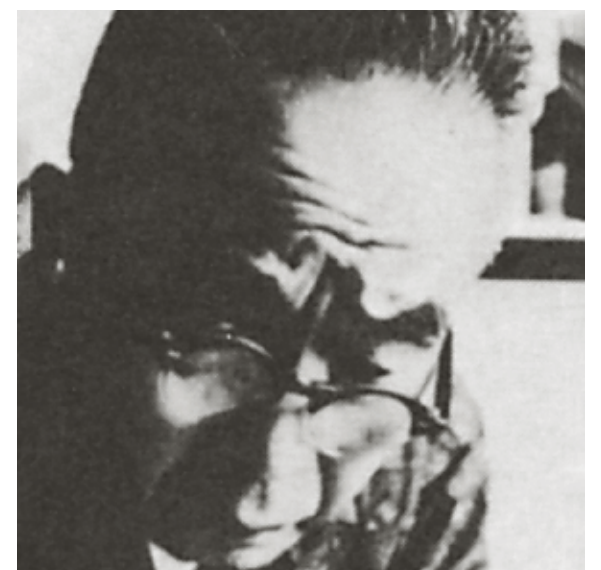
金沢市工芸協会会長 中 川 衛

戦後新発足後の会長紹介

初代会長 木村雨山

昭和 24 年～ 25 年

戦後の動乱期ともいえる最も困難な時代に会長として就任、わずか 2 年の短期間ではあったが、会のみならず工芸界の再建に手腕をふるわれた。昭和 52 年 5 月、86 歳で黄泉の世界へ旅立たれたが、ありし日の姿を当会会員の毎田健治氏は次のように偲んでいる。―― まだ肌寒さが残る 4 月半ば頃。下図を見ていただきに上がった日のことであった。浴衣がけの先生は、「庭の片隅に咲く花にも朝、昼、夕と、それぞれに異なった姿がある。だから、その何時の情景を描いたのか、解るようなものでなくてはいけない。花一つを取り、花びらを分解し、どういう構造になっているかを知り、花の気持になって物をつくるようになれ」と、2 時間余りも懇切丁寧に数えてくださり、帰日には姿が見えなくなるまで見送ってくださった。写生における姿勢と同様、その時の師の言葉がいつまでも鮮明に心に刻み込まれている。――



第 2 代会長 小松芳光

昭和 26 年～ 43 年

戦後の復興期に就任。18 年間の長期に渡って会長を務めあげられた。就任当時は材料の入手さえ困難な時代で、工芸では生活できないため離れていく者も少なくなかった。会員も 30 人程度で展覧会の開催も危うく、出展作品を集めて歩いたこともあったという。氏の後継者育成にかける熱意は、この時期に培われたものであろうか、なみなみならぬものがあつた。傘寿を迎えられても必要とあらば如何なところでも足を運び熱弁をふるわれていたそうである。その卓越した見識は誰しもが一目置くところであり、工芸ブームであった昭和 59 年当時、後輩達に望むことは、「工芸は用から出発したものであるという原点を踏まえ、ただ美のみの追求にとらわれるあまり誤った方向へ進むことのないよう十分留意されたい」というものであった。会長を退いた後も、顧問の一人として、長く元気に活躍を続けられた。



第 3 代会長 成竹登茂男

昭和 44 年～ 48 年

染色部門の進展期に小松氏の後を受け就任。この頃は会員の中にも全国展に応募する者がかなり出てきており、会そのものも充実しつつあった。当時の金沢市工芸展は歳暮シーズンの 12 月に開催されていたため、出展作品もそれに適した商品的なものが多く、よく売れたという。氏の就任後期には、それまで不定期であった臨地研修制度が毎年行われることになり、会員同士の親睦が一層はかられるようになった。第 40 回記念「金沢市工芸展」に際して、氏が語った工芸協会に対する感想は、「それぞれの会派に属する会員がこぞって会の運営に加わり、しかも 40 回にもなる展覧会を開催し続けてこれたというのは日本に二つとない、金沢ならではのものであり、今後とも大事に守り育てて欲しい。」というものであったが、その語り口からも、伝統的な様式にとらわれることなく軽妙な意匠構成と自由なタッチで友禅界に新風を吹きこんだ昔ながらの若々しい情熱が良く感じとられたという。



第 4 代会長 板坂辰治

昭和 49 年～ 52 年

当時の会員は 60 人余で、会の運営に関しては持ち前の熱意と親しみやすい態度で臨まれた。特に展覧会は会長自らの情熱的な創作活動で、より一層中味の濃いものになった。「タッチャン」の愛称で慕われ、気さくな人柄は今も会員の心の中に生き続けている。当会会員で最も近い間柄であった関源司氏は次のように語っている。「初めてお目にかかった時は先生の最も意気盛んな頃で、まさに情熱の塊といった感じであった。学生に対する愛情も制作に対する熱意も、あの出会いの時の情熱そのものであり、豪快な飲みっぷりとロマンチック（よく口にされた言葉）で繊細な心くばりは、重厚な作品の中にもよく感じとられる。」



第 5 代会長 大樋陶冶斎（十代大樋長左衛門）

昭和 53 年～令和 3 年

43 年間という長きに渡り会長を務めあげられた。この間、工芸はバブル期の需要の伸びと多様化、バブル崩壊後の景気低迷による売れ行きの激しい落ち込みを経て、その文化的価値や観光資源としての重要性が再評価されるにいたるが、そうした時代にあつて、金沢市工芸展では、伝統を感謝して受け継ぎ確固たる信念をもってぶれないこと、その時代の空気を感じて今求められる新しいものを創作し競い合うこと、を徹底された。また本会の提唱により金沢市が平成 9 年に「世界工芸都市宣言」を行ったことに合わせ、「世界工芸都市会議・金沢」を開始し、それまでの「金沢工芸大賞コンペティション」を世界公募展「世界工芸コンペティション」に改組、平成 21 年のクラフト&フォークアート分野でのユネスコ創造都市認定に尽力されるなど、工芸都市金沢の世界への発信に大いに貢献された。

